



絵 星野 文昭

ソウ ソウ



さわさわ 9号

重信房子さんを支える会 (関西)

6・14集会に参加して

森本忠紀

私の住む家は、高校の通学路に当たっています。毎日朝夕大勢の高校生が通ります。私は彼ら若者との間に、ほんの少しでもコミュニケーションがほしくて、「袖触れ合うも多少の縁」とばかりに通りから見えるように小さな掲示板を掲げています。私の短歌作品や友人が映して送ってくれる季節の写真、それと英語を掲げています。その英語として、今月は「グループ・レジストからのメッセージ」を掲げました。

6月14日憲法9条改悪に反対する集会が東京であり、私は「さわさわ」の旗を持って参加いたしました。この集会には現在市民運動を続けておられる様々の運動体が結集されていて、その代表の方がみなさん報告をされましたが、いずれも深く鋭く日本の現実を抉りださずにはおかないもので、その多様さ、多彩さに私は興奮し感動いたしました。このうちのどの一つを取り出しても、毎日私たちがテレビや新聞で目にする、ニュースや情報は何をくだらないことで大騒ぎしているの？となるような、その底の浅さというか、人を愚弄し、生きる力を奪うためにのみ存在しているんじゃないの？と言いたいくらい、質の悪いものだということがよくわかります。

そのいい例がこの「グループ・レジストからのメッセージ」です。アメリカから集会宛に送られたこのメッセージは、アメリカ政府はイラクとアフガニスタンで間違った戦争を続けています、とはっきり述べています。そしてその間違った戦争を続けているアメリカを助けるために日本政府は自衛隊を送っているという認識をはっきり示して、自衛隊派遣を止めるためにがんばっている日本の人々を支持するとはっきり宣言しています。このような情報が私たちの暮らしに提供されることは滅多にありません。私達の頭の中が日々くだらないがらくたで一杯になるのも道理というものです。高校生の頃にこんな英語に接したかった。さすれば、異国の言葉を知る喜びに若い胸はどんなにか震えたことでありましょう。英語と言え、高校生の私はテストでよい点が取れるかどうかということしか頭になかった。そのへんの高校生事情は現在も変わらないのではないのでしょうか。

6・14集会はこのようなメッセージ、報告、アピールが講演もふくめて十数本から構成されていました。そして、第一部と第二部の冒頭には、それぞれ、カヌーンとピアノ演奏、ピアノとスライドによる「平和のメッセージ」という、音楽家による素晴らしいパフォーマンスがあり、また、ラストの、ベートーベンの「第九」のメロディーで日本国憲法の戦争放棄を歌う合唱は、参加者が自由に出てよいというもので、私も舞台上上がりましたが、新鮮で大いに意気上がりました。

このように6・14の集会は力強い充実したものでありましたが、足りないものがあるなあと感じたことも報告しなければなりません。それは、ああ、重信さんがいてたら喜ぶやろなあと感じたのが始まりでした。それが、何で、いてへんねやろという疑問に変わりました。そうです。この集会はいてる人しかいてません。重信さんや、丸岡さん、泉水さん、大道寺さん、…、名前を全部挙げることはできないけど、獄中に捕われている大勢の人たち、その人たちがいないということが、集会の半ばくらいから私は気になり始めました。獄中の人たちを忘れていませんかと言いたい思いが頭をもたげました。

一緒にいないのは獄中の人だけではありません。憲法9条改悪の影響をものに受ける、肝心のわが日本の国の人々が一緒にいない。ここにいるのは、集会に参加した約750人の人だけ、そう思うと、急に寂しくなりました。

「憲法9条改定を許さない全国集会」、許さないと言いながら、もうここまで許してきています。国民投票法案まで成立しています。長年にわたって国民は敗北を強いられてきました。等しく壊され、痛めつけられながら、敗北は個人的なもの、自分一人だけのものとしてのしかかってくる。そのようにして、根底から壊された暮らしにそれでもしがみつくしか術がない、この国の人々のありよう。それこそが、許してしまっているという現実ではありませんか。

許さない！と拳をつきあげる私。その私が許してしまってるのだ。そして許してしまっているが、そんなことさえ意識していないこの国の人々。許してしまってる現実より他に現実はないと思込んでいる人々。彼ら、この国の人々とどのように共感し合えるのか。それがこの集会の課題だと思いました。

それはまた、「さわさわ」の課題にほかならないと私は考えます。

<再び京都へ>

何十年たったのだろうか。いつのまにか開通した地下鉄に乗って今出川通りで降りました。烏丸今出川だったかな...?きょろきょろと不安な足取りのまま、階段を地上に上がりました。見慣れた角、同志社の角をさがして、目を凝らすと、御所の緑と対面の同志社の敷地。確かにここだったのでは...あの頃、市電の通っていた道は、どの街ともかわらないどこにでもある道路になってしまった。市電のあった道を少し行くと、同志社の学生会館が見えました。こんな風だったろうか。寝泊りし、いつも駆けあがった階段も近寄りやすい。少し立ち停まったあと、道路を渡って、斜め先の寺。相国寺といったか。広々とした境内を歩いては、議論し、又、その辺りに腰掛けては、議論した昔。向こう側に通り抜けられたと思ったけど、そうではなかったのか。草がそよぎ広々とした自然の境内は、いつの間にか狭くなってきっちりと管理されて、どこも、人間の手で整頓されてしまっている。思い出は、現実とかけ離れてしまうものなのかも知れない。

歩き疲れて、学館の方に戻り道路に面した小さな店に入りかき氷を頼んでみました。いつも仲間と一緒に、一人でこんな店に、かつては入ったこともないけれど。この店は昔、よく来たな、もっと広がったようにも思う。棒状のアイスクリームを買って、相国寺の境内を食べながら歩いた。

今日は、夕方の京都での待ち合わせまでの間に、用事のない半日をつくって、一人で来てみました。京都の昔の知っている地域、同志社と京大、北白川に銀閣寺通り、それから四条、円山公園と、かつてのなじみの場所を歩いてみようと思い立ったのです。センチメンタルジャーニーも、たまには悪くないかなと。道を戻って御所に入ると初夏の緑が美しい。その下で、孫と遊ぶ年配の男性とすれ違いました。通りすぎる時に、静かに目礼の挨拶をこちらに交わします。ああ、これは、日本のしぐさ。こんな風に、知らない人々と道を譲りあったり目礼を交わしていたなど、遠いことのように懐かしさがこみあげます。

当時は、あたりまえのようにぞんざいに過ごしながら、何を見ていたのだろう。覚えていないことが多すぎる。見ようとしなければ、見えないことが、見えることより遥かに多いと知るのも、時間を経て知ったことですけれど。建物の色、道の辺の扉、咲いていた花。今と同じだったのだろうか。何か違和感がありながら、それを正確に置き換えることの出来ないもどかしさがこみあげてきます。だれでも故郷に行ったら感じることも知れませんが。樹々は時間の分だけ太く大きくなり、小枝や幹につかまったり身体をあずけて話しこんだような樹々はありません。

銀閣寺に行ってみる。昔とかかわらない坂道。どの店もきれいになってしまいました。登りつめた先の銀閣寺も、がっちり管理された人工的な感じで、昔のわび・さびの風情は、どこかにいってしまったように感じるのは私の感傷のせいでしょうか。この斜め下にあった友人の下宿、朝方までみんなで、喋り疲れて、寝もせず銀閣寺に入り込んだことがあります。銀閣寺の縁側のへりに座ったり、寝ころがって話をしたように記憶しているのに、それは幻なのか？それとも、あれ以降、厳しい管理になったのか、きっちりとした扉門は破れた穴もなさそうです。拝観料も高いです。昔は、そんなものあったけ？あったとしても、精精、お賽銭の額だったと思うけど。銀閣寺の庭に出てみると、観光客が多いせいで、お寺というより旧い遺跡のよう。今も寺として機能しているにしては、坊さんまでローマやギリシャの遺跡の売り子の労働者みたい。金儲けの為ではないのですが、銀閣寺がきれいになり過ぎてしまっているように思いました。ロープで仕切られた矢印の通路を、ベルトコンベアーのように歩かされ、ぞろぞろと流れに乗って移動です。その間に、急いで昔の記憶を引っ張り出しながら歩いて行きました。友だちと来るべきところなんだな、やっぱり。そんなことを思いながら寺を出て、坂道を下りました。この道は、夏の蝉時雨をあちこちから背負いながら歩いたな...。また冬の寒い中、縮こまりながらよく歩いたな。かつての友人の下宿の辺りも、そんなに変わっていない。小さな路地に新しい家が建っています。北白川に向かって降りてくると、パッと昔

のままの京都が広がります。北白川にもう市電はないのだけれど、幻のようにさっと時代がよみがえります。こうして降りていくと、市電だまりから友だちが手を振っていて、疎水の脇には桜が満開だったな...などと、幻のようにくらくらします。銀閣寺から降りてきて、左の哲学の道や真っ直ぐ奥平さんたちのいた下宿の方を見通せるこの交差点は、昔のままです。しばらく疎水の際に立って広がる情景を眺めていました。

帰国した私はこんな風に京都に来たことがあります。逮捕時の記録によれば、私は1997年から2000年までの間、8回も出国と帰国を繰り返していたとのこと。私の帰国は日本をもう一度「平和の砦に」変えたいという願いがありました。不遜にも自分の帰国が仲間たちの役に立てる、立ちたい、という思いで日本に帰国していました。そして又、これまた共同してきた大切な人々と在外でこれまでどおりに会っていました。ことに、97年にペイルートで逮捕された仲間の釈放や政治亡命に関して、対外的に「リーダー」であった私が登場しない訳にはいかないこともありました。その為、往復がいきおい多くなってしまいました。

<大阪の街で>

71年日本を発つ前の、私たちの通いなれた拠点は、当時、通天閣のすぐそばにありました。といっても、そこはNさんの事務所兼住居です。善意と好意に甘えて、よく集まっていました。

通天閣の“新世界”は、不夜のように、満艦飾のネオンの点滅や色彩の鮮やかな看板、軍艦マーチや演歌の絶唱、店や劇場のおもしろい呼び込みやモツや酒の匂い。夜になるとこの通天閣界限はいきいきとしていました。日中は剥げた看板やみすぼらしく閉じた店が、夜になると生き物のように活気を帯び、ひっきりなしの人波でした。

東京でも山の手の世田谷に子供時代を過ごした私にとっては珍しく、昔、年に数回、家のすぐ近所に開くボロ市か天祖神社の祭の縁日を思わせました。子供時代、10円玉を握りしめて心躍らせながら、夜まで過ごした待ち遠しかった日々が、毎日毎夜、開いているような一角でした。Nさんの事務所兼自宅で、打ち合わせや作業を済ませると外に出て、尾行がないか見

渡してから、大通りを隔てた通天閣の繁華な一角へ、食事に出かけました。その日の気分によって一膳飯屋やラーメン屋や、さっきまでの議論の続きをしながら浮き浮きとする“新世界”という辺りを歩いていました。東京生まれの私も、だんだん、呼び込みにも、あちこちからジャラジャラとするゲームの音もバックミュージックのような心地で聞きながら、馴染みの街になっていきました。

そんなある日一度だけ、虫歯が痛くなって通天閣の角の歯医者に駆け込んだことがありました。翌日からどんどん腫れて、痛みは増すばかりです。Oさんの父上が阪和線だったか、どこかの駅前で歯科医院をやっているから、そっちの方が良いと、「安いと言ってたけど、きっと不潔だったんだよ」とOさんの手引きで電車に乗って行ったことがありました。父上は、よく消毒されないまま詰めたので菌が繁殖した、と説明して手際よく治してくれました。息子が初めて連れてきた友だちというので、お寿司をとって歓待してくれて、まだ痛くて困ったけれど、食べないのも失礼と、一所懸命食べました。市大のNさんからの便りで、このOさんは、80年代、すでに亡くなられたと知りました。彼も医者になり、警察病院の当直医の時に、手術中の患者から移って激症肝炎となり、直ぐに亡くなられたそうです。

その話を聞いて、あの通天閣の部屋での夜のことを思い出しました。ある日Oさんが、何人もの雑魚寝のような具合で通天閣の部屋で寝ていたときです。突然ガバッと身を起こしたので、Nさんが「どうした？」と聞くと「いや 嫌な夢をみた。手術中の病人のコレラ菌が僕の口の中に入ってしまった。患者の病気で死ぬのか...嫌だな、と目が覚めた。」というので、皆で笑いました。本人は真面目で、外科医になるべきかと悩んでいたのが、そんな夢になったのでしょうか。「そんなことないよ、どこに居ても死ぬときは死ぬよ」と、皆で話していたのですが、その時のOさんの夢の話をNさんからの便りで思い出したものです。

大阪に行くと当初は桃大だった拠点は、Nさんの事務所兼住居のあるこの通天閣と、そこから天王寺公園を歩いて横切って、阿倍野筋の内装工事中のMさんの手作り中のジャズ喫茶店が当時の私のフィールドとなってい

ました。

ある日、アラブから帰国し泊まっていたアパートが「岸の里」だったので、地図でそんな遠くないことを確認して、歩いて、通天閣へと向かいました。街に馴染むようにどこにでもいる50代の女性の格好に、いつも心がけていました。今日は小さいリュックを背負って観光地にいる50代女性スタイルとしました。真っ直ぐに、大通りを天王寺方面に向かって30分くらいか、恵美須町辺りに着きました。昔の風景は、もう憶えていません。日本に帰国して思ったのは、どの街に行っても、小奇麗で、特徴がない何処にでもある街になってしまったことです。そのわりに「岸の里」でも「天下茶屋」でも路地の商店街はさびれていて、道ばたの道祖神だけが昔と同じように佇んでいて、昔の方がよかった...と、訴えている気分です。

通天閣も区画や路面電車は昔とかわらないけど、人もまばらですね。夜になると活気をとりもどすかも知れません。昔も、そういえば、一度も通天閣に昇ったことがなかったなと、昇ってみることにしました。それほど高くない展望台。そうか、昔、展望台が廻ると言っていたのは、これか...と、インスタント味のコーヒーを飲みながら天王寺公園などを見下ろしていました。昔の人々の活力が、日本中から消費されてしまったみたい...。搾り滓のような社会なのか...私は中国や中東の圧倒的なマンパワーの活力のエネルギーの中に暮らしたり見たりしていた分、日本の静けさは刀狩以来の庶民の諦めのようにみえてしまいます。

<ピストルの音がする>

ある時、2000年のある日「岸の里」と「玉出」の間のある小さな何とかハイツに居たときです。メトロの「岸の里」で降り、玉出方面に向かって、丁度、真ん中辺りにこのハイツはあります。ある日、ちょっとした買い物に玉出商店街に出かけました。ハイツからすぐの公園を通過して、メトロの「玉出」の方に行くと、又もうひとつ小さな公園があります。そこから左に折れると大通りで、その対面が玉出商店街です。

玉出商店街の奥へずんずん進むと、西天下茶屋商店街とつながっています。八百屋で買い物をし、又、大通りを渡ってブラブラと歩いている

ました。昼頃だったか、もう時間も憶えていません。大通りの角が銀行で、その横を通ると公園です。時々、そこで逆上がり鉄棒をしたり、鉄棒でちょっと遊ぶのです。

銀行を過ぎて公園の角のところで、パンパンと乾いた音。これは、アラブでは聞き慣れたピストルの音です。怒号と走って行く男が見えました。これは何か、やばそう...と、公園に入らず、振り向かずに5分とかかからないハイツへと足早に戻りました。何かあったな...。小さな部屋に戻ってTVを点けました。しばらくすると上空をヘリコプターが旋回しているのがわかります。そのうちTVでも速報。玉出の何とか銀行に現金輸送車が出発するか到着したところに一人の男が強盗。銃で撃たれて負傷者も出ていました。現金が奪われたかはもう忘れました。とにかく、事件でした。不安定な身分の私には、こういう時は困ります。犯人はどっちの方角に逃げたとか、どんな服装をしていたとか、勿論わかりませんが、協力は出来ません。それに地帯一帯の住民居住捜査なども、嬉しいことではありません。私もしばらくその地域を離れました。結局逃げた犯人はずっと、分からずじまいでした。

<食中毒と逮捕>

この時も、岸の里のハイツに居たときです。2000年のことです。11月10日だったか、海外へ旅行に出発することになりました。11月に入って、東京からこのハイツに来ました。確か、5日が土曜の週末で、7日に高槻で用事をすませ8日にハイツに戻ってきて整理、出発という段取りだったと思います。それで、ある友人に8日の夕方に書類資料などを持ってきてほしいと頼んだのですが、友人もその日は時間がとれないと(木)の夜に大量の荷物を届けてくれました。週末は、フロッピーの整理予定にしていたけれど、まず、それをやることにしました。ところがその(木)か(金)から、食中毒になってしまいました。東京から戻ってきて、魚屋で、サーモンの切身か「煮魚用」と、経木に書いてある一塊を買ったのです。石狩鍋風に煮込もうかと、買いました。ところが、なんだか刺身にしても食べられそうと、食べてしまったから苦しみました。

5, 6時間たってたか、夕方から夜、しびれと発熱。あ、これは食あたり、食中毒です。熱を測ると一気に39度で意識も途切れがち。緊急時の携帯のナンバーや病院など一応は決めてあったのですが、なんとか自力で解決しようと思いました。まだ病気が昇ってくる、つまり勢いを増してくる感じです。この地域で夜間の営業している薬局は、その時々が変わるのですが、一応その順番は記録していました。まだ、コンビニで風邪薬など販売を許可すべきか議論中で、薬事法で、コンビニには薬がない時です。吐いたり、熱くなったり寒くなったりしながら、玉出のメトロの向こう側まで、やっとの思いで薬を買いに行きました。一目で、病人と分かる風体だったらしく、薬剤師らしい人がびっくり。「どうしましたか?!」「食あたりのようです、薬は何か、ありますか?」と言うと、「即、病院へ行きなさい、処方なしに薬はお売りできません。」そうか...ここは日本だった...。抗生物質の購入も断られてしまいました。下痢止め、吐き気止めなど余り効き目がないものを買って、ふらふらしながら、やっど、戻りました。不法滞在の中国人やベトナム人や外国人も病気になったら大変だな...などと考えつつ。

戻って熱を測ると40度を越えています。ポーッポーッと意識が欠けるようです。冷蔵庫においてあったソ連製のクロロフェニコールとフランス製のアンピシリン、期限が切れたけどこの際良いか...と、アンピシリンを飲むことにしました。アンピシリンもこのクロロフェニコールもチフスにかかった時以来、持っていたものです。レバノンのベカー高原の川沿いの軍キャンプにいた時のことです。そこは大きめの沢ガニがたくさん獲れるので、茹でて食べていましたが、どうも、それがあたったのか、チフスが流行りました。以来その川はチフス川と呼ばれていました。その辺りでは、チフスは日本のような法定伝染病とかの病気ではなく、アンピシリンかクロロフェニコールで、治します。ただ、数値が下がらず保菌者になってしまうことが多いのです。医者も「保菌数値?問題ないよ、助言しとくけど社会主義国には行くなよ。見つかると隔離されるから」といった程度でした。とっくに私は完全に治っていましたが、以来、抗生物質は携帯するよ

うになりました。

水で頭を冷やし、吐くだけ吐いても、もう出てきません。何かあった時の為の書き置きを、走り書きで、枕の横に残して気絶のように睡眠。気がついたら翌日の昼頃だったようです。助かったみたい!

その後も抗生物質をやたらに吞んで安静!ポーとして力の入らない週末を過ごしました。荷物整理どころではありません。11月7日の月曜日の夕方には、高槻のホテルに用事がありました。部屋一杯に、持ち込んだ未整理の荷物を、そのままにして立ち上がりました。何とか歩けそうです。

風呂に入り着替え、出かけることにしました。毒は抜けていたようです。やっとの思いで高槻駅に着くと、売店で初めて、元気の出る何とかドリンクを買って飲みました。友人が一度くれたことがあって、何だか気力が入った気がしたことを、思い出したからです。

それから、ゆらゆらと歩いて高槻のホテルに行きました。

<逮捕>

ホテルに一泊し大分元気になりました。朝ロビーに降りたところで、異常を発見。10時40分くらいです。マネージャー風の男が合図するように大声で「ありがとうございます」と、怒鳴りながら目は他をさがして夢中でキョロキョロ。これは何か包囲されたようです。自動ドアの外には男たちがズラリ。「奥平房子さんですね、ちょっとお尋ねしたい」と、言い終わらないうちに腕をつかみ、男たちが増えてきました。ぶるぶると武者震いなのか緊張で震えていたのは、私に声を掛けた警察の方でした。逮捕状を見せろと言うと、コピーされた小さなメモ用紙みたいな紙切れです。「逮捕状じゃないじゃないか、逮捕状を見せなさい!」という間に両手首を捕られて、何重にも封固されました。引きずるようにすぐ側の「王将」の駐車場に停まっていた装甲車やパトカーの方に連行され、車に押し込まれました。逮捕状なしでも「緊急逮捕」は不法ではないなどと怒鳴っていました。

その駐車場に留まって、車の中で押収品目録づくりです。「事件とは関係ない中身は返しなさいよ」と、言い合いながら、ハンドバックに入っていた押収されないものはお金や人民新聞やわずかなものでした。その間にあれこれ考えつ

つ、他の人々に被害がいくなあ...と気がせいたいました。

帰国してから凶々しく慣れてしまったために油断していました。何度か尾行や視線の感覚も感じ、また、夜間のゴミ回収も突然増えて変だと思いました。でもそれを小さな思い過ごしとしてしまいました。自分が平和的な活動をしているので、自分までそう思っていたような市民社会への溶解…。時間と共に警戒心が形式的なものになっていたのです。「テロリスト」と狙われているのに、「平和主義者」のような自覚のギャップ。滑稽でもそんな次第でした。

あの部屋を誰か片付けてくれたらいいけれど...などと、気になりつつ覚悟を決めました。「この捜査の責任者のあなたの名は？」と聞くと「大阪府警の養老です」と名乗り、興奮緊張の面持ちの真面目そうな中年でした。押収品目録を作成後、バックやお金を私に戻し、高槻署へと移動。緊急逮捕は、逮捕状なしで可能であり、逮捕状がないので東京へ行きます、と通告。すでに、救援連絡センターの弁護士を要求していたので、高槻署で、弁録拒否、写真、指紋採りなどしていると昼食の知らせの頃には、救援連絡センターが派遣してくれた弁護士がすぐに来てくれました。

ホテルのところで、10時40分くらいに逮捕され、40分以上王将の駐車場の車の中で、諸々の押収品目録作りをして11時半近くに高槻署でした。そこで写真、指紋採りなどの後、昼食のパンが配られて、すぐ弁護士面会。刑事からは午後2時10分の新大阪発東京行き「ひかり」に乗るので弁護士面会は急いでくれと催促です。急ぎ立てられながら、逮捕状況を弁護士に説明しました。そして、押収品目録押収を免れたお金やパンフ、カバンなど、すべて全部、弁護士さんへの宅下げ手続きをして手ぶらで、東京へ行くことにしました。

高槻署を出る時から鈴なりのカメラがこちらに焦点をあてています。刑事らは「人権上」という口実で、コートを被せようとします。「やめてください。私は、これまでも今も悪いことも恥じ入ることもしてこなかったし、顔を隠して連行される必要はない。」と断りました。「でも手錠が見えると...」と刑事。「かまわないです。私は何も悪いことしていません」見栄でも首(こうべ)を垂れずに、闘いの正義を伝えたい。闘いの道には誤りはあったかも知れないけれど、権力に立ち向かい、ものを言い行動することは、悪いことではなく恥

でもない。逮捕されてしまったことは、きっと、ペイルートで、欧州で、辺境で、娘も昔からの日本の世界の友人たちも知るだろう。その時、彼らに助けられてきた感謝をこそ、限られた、逮捕された条件でも、姿にこそ示したい。首をあげて本名に返ってここから進もうと決心しました。

サムアップはそんな思いの中から自然に生まれたポーズでした。のちに、警視庁で後から逮捕されて入ってくる中国人、韓国人、日本人たちは、皆、TVを観たよ!と、サムアップが、獄中では流行したものです。みな取調室から戻ってくると「うまいった!」はサムアップです。つい二年前の第一審判決での法廷に向かう東拘のバスの中でさえ、憶えている人がいて、サムアップで挨拶していました。

2000年11月8日午後、高槻から護送車で新大阪へ、そして、そこから東京へ。

何百というカメラのガシガシャという音が、新大阪でも、新幹線の中のトイレに行くところまで、押し合いへし合いの、浅ましい写真撮り。フィルムがもったいないなあ...やることは他にあるでしょうに。車掌室のようなどころに入れられて、連行の女性刑事2人と男2人。新幹線の窓に広がるのは、日本ののどかな秋。柿の紅い実、積まれた稲の束、青く晴れた空、ああ、何といい日なのだろう。大井川を渡る時、思わず西行の歌が心の中で零れました。“年たけてまた越ゆべしと思いきや いのちなりけり小夜の中山”。ああ生きて捕まった以上、日本で再び「重信房子」になったな。ずっと昔に封印していた私の名前。そうかそれなら又「重信房子」で生きてみようか...そんなことを思いながら、のどかな秋の日本を縦断して上京しました。

東京駅には、驚くほどのカメラと人の渦。“「がんばれよ!」「こっちを向いて!」”何か、訳のわからない怒号とかカシャカシャとカメラのシャッターの音。ありがとう友人たち!マリアンと支えてくれた世界の友だちありがとう、娘よ! 今から、日本から重信房子として、自然体で再出発しますよ!サムアップ、共に!

そんな思いでした。そして、以来、今「さわさわ」と、こうして出会い

続けています。

けれども、私の帰国、逮捕によって友人から見ず知らずの方々にも被害を与えてしまいました。私の旅券の不正使用で被害者の方々まであたかも共犯者のような疑いや苦痛をもたらしてしまいました。公安の情報操作の通りにマスコミは騒ぎ立て多くの方にも被害、迷惑を掛けました。被害を受けた人々に、この場を借りてお詫びします。あの時からもう9年目になろうとしています。公判で不当な重刑と闘いながら、旧友と再会し、また、新しい友人と出会いながら来ました。これも悪くない日々でした。さわさわと微力を結びながら、日本をよりよく変えていきたいと思えます。共に。

おわりに

“判決はおわりにあらず はじまりと まつろわぬ意思ふつつつとわくと詠んだのは第一審判決の2006年2月23日の法廷でした。以来、控訴審を経て現在上告中です。

判決には、不服もあり、抗議の思いをいだきつつ獄中でも、又、獄を出たあとでも、みなさんとの再会に私の希望を重ねて、生きていきます。さわさわ (Together. 共に) 万才! これからも共に。

邯鄲の夢の如くに独房で

胸躍らせる人生もある

<完>

手術は すんで 日は暮れて

眼を閉じながら 明日を待つ

田川晴信

気がついたら、集中治療室の垂直にされたベッドにいた。食道は全摘、胃は四分の三摘出、残された胃の一部が、食道に代用されていた。

病室に移り、次第に管が抜かれて、一週間程で、ヨチヨチ歩きができた。

7階の病棟ロビーからは、眼下に鴨川を見て、大文字、吉田山、時計台の京大を眺めることができた。

40年前のみぞれ降る冬だった。「京大を守れ」の掛け声と共に、共産党・

民青を軸に、同調する大学職員、学生によって逆封鎖された京大正門に向けて、会社を辞め、赤いヘルメットを被り、地区反戦青年委員会の仲間と、降り注ぐ放水の中、何度も突撃を繰り返したことが思い出された。

“何も変えることはできなかった。”

京大は教育予算をふんだんに使って、一段と肥大化し、同志社、立命と産学提携を競い合っている。産大はもちろんのこと、仏教大も、龍谷大も…。

ソマリア沖に、海賊退治の名の許、自衛隊が派遣されようと、河原町通りに、反対のデモ隊が渦巻くことはない。

55日間の入院の後、帰宅した。自らお粥を炊き、食べる日々が続いている。森本忠紀君は、自分で料理したものは本当においしいと言ったけれど、私には、料理のセンスがある人が手際よく作ってくれた料理の方が、はるかに旨い

入院中に悲しいできごとがあった。

同志社の後輩の蒲池裕治君が死んで往った事。癌闘病中の身で、昨秋の円山集会にもさわやかな笑顔とともに、鎌倉から来てくれた。私は退院し、彼は還らぬ人となって、往ってしまった。

みんなが今秋の円山集会(10月18日)の前日に、追悼会の準備をしてくれている。彼の無念を抱き、“Non”の拳を今は静かに振り上げた

い。

房子さんにも癌細胞との闘いが拘留中の獄の内で続いている。

「この国のあり方」を求めて、闘いの烽火を燃やし続けなければ。あらゆる戦争をこの世からなくすために。戦争はすべて侵略戦争から開始されている。

今夏、“8月6日”忠紀君や、原啓介君達と広島へ行くことに決めた。私は40数年振りで行く。

私たち日本人が原爆を広島、長崎に落したのだという思いを抱いて。

<ヒロシマ>といえ

<ああヒロシマ>とやさしくは返ってこない
アジアの国々の死者たちや無辜の民が
いっせいに犯されたものの怒りを
噴き出すのだ
<ヒロシマ>といえ
<ああヒロシマ>と
やさしく返ってくるためには
捨てたはずの武器をほんとうに
捨てねばならない

作詞：栗原貞子

貞子さんは91歳まで、自分で書いたプラカードを持って、集会とデモに参加し、92歳で死んで往った。

最後は侵略者の武器を奪い取り、闘う日が来るかも知れないが、自らの侵略の武器を持つ自衛隊（軍隊）はいらない。

“武器よさらば”これがテーマである。

<インタビューで綴る京都学生運動物語>

高瀬泰司の事

新開純也

一私が大学へ入った1964年、指導者として、塩見さんや高原さんがおられて、経験した大きい闘争として大官法闘争がよく話題になりました。その上の世代になるのが、新開さんや泰ちゃんて安保世代と呼ばれていました。安保世代の特徴としては、とにかく存在感があること。そして、横の連帯感が強いと感じられました。お互いをよく知っていて、互いに認め合うというか、尊重する、そういう気風がいいなと憧れたものでした。でもそれは、高瀬泰ちゃんという強烈な個性を私が勝手に安保世代という風に敷衍していたのかも知れません。まず、そのあたりから伺いたいと思います。(森本忠紀)

僕が、重信さんに会ったのは一回きりである。もう40年近く前、赤軍派ができ、彼女が、パレスチナへ行く前だったろう。高瀬泰司の店、「白樺」

で、ふらりと飲みに行った時、高瀬から“これが、赤軍派の重信（あるいはフーコと云ったか）、これが、俺の同僚のブントの新開や”といった紹介のされかたをしたと記憶している。しかし、特に会話をした覚えはない。

森本君の注文に応じて高瀬泰司についての駄文を認める。

彼のことは、僕が一時“ブルジョワジー”だった時、日経新聞の“交友抄”に「吉田山の石段」というややセンチメンタルな文を書いた。

1959年—60年安保の前年—京大に入った同期である。

59年は60年安保の前年であり、又その直前58年12月にブントが結成されていた。京大での中心メンバーは、今泉、北小路、小川、佐野氏らである。我々59年入学組は、60年安保をブント、全学連の一兵卒として戦い抜いた。渥美、浦野、清田、榎原、高瀬、等々、の第二次ブントの中心になるメンバーを含め、100名ぐらゐの同盟員とシンパがいた。

高瀬に初めて会ったのは、59年の秋、一緒に校内でピラまきの時だった。痩身の厚い眼鏡のやや威風の風貌が印象的だった。そして、59、60年の安保闘争を、毎日ガリを刷り、ピラをまき、集会をし、デモをするという忙しい、シンドクはあるが楽しい日々をすごした。

60年安保が終わり、第一次ブントが、あつという間に分裂し、今泉、北小路、小川氏らが革共同に移行したが、関西では、同志社、大阪市大、京大、そして前田氏を中心とする労働運動部隊を中心に共産主義者同盟関西地方委員会として温存され、やがて関西ブントとなる。

学生運動も、東京の沈滞とちがって大衆的基盤を持って健全だった。それは例えば60年の大官法闘争であり、清田府学連委員長が象徴だった。

故人となった二人の友人、高瀬と清田のキャラクターをこの闘争を通じて思い起こす。

清田についてはこうである——

大官法闘争のピーク時、円山音楽堂での大集会での清田の演説と、その後の四条河原町で機動隊を突破したデモは、当時の参加者は今でも語り草となっている。

イェーリングを引いて人民の抵抗権を説き学生を鼓舞した名演説だった。

側で聞いていて演者と聴集とが演説が進むに応じて一体化してある種のエクスタシーに達する様が見てとれる程のものだった。

弁論の才は、先天的要素が必要な事は言うまでもないが、同時に、その才が、さえるのは、その場のシチュエーションと弁者の思想性なりキャラクターが渾然と一体になる時である。その意味で清田のその時引用したイェーリングと急進的な自然法的抵抗権の訴求は、よくも悪くも清田ならではのものであり、又、それに呼応した学生の当時の思想性を表していたと云えるだろう。

高瀬についてはこうである。

大管法闘争の戦術として、その後の全共闘運動に連なるような「一万人投票による京大全校封鎖」の提案である。全学ストライキというなら常識的であるが、これは、いわば、大学の自治をコンミュニ的に創って権力に対峙しようという趣旨のものである。

当時、私は同学生会委員長でもあり、京大ブントのキャップでもあったが、この案の云いだしっぺが誰だったか記憶にない。最終的には、ブントの会議で決定し、同学生会で当時の白川真澄率いる共産党との論戦を経て決まったのだが。推測するに、このような戦術は、高瀬の発案であり、清田がふくらませたものだったろう。

このような“お祭り事”祝祭的イメージの戦術は、高瀬においては考えられない。

人は全て時代の子であり、人の思想性や資質が、時代に応じて輝いたり、陰ったりする。大管法から全共闘までの約5年間、高瀬は清田の後の府学連委員長をやったり、個人的にはテミちゃんと結婚して「白樺」の亭主になった。その間、私は、時々、彼のデートに付き合ったり、いっしょに肉体労働のアルバイトをしたりしていた。さえない時期だった。

高瀬が、位置を持ち輝くのは、なんと言っても全共闘運動の時代である。

そこには、彼の資質が生きる要素がそろっていた。大衆闘争の盛り上がりがあり、党派は存在はしていたが、一要素であり、大学という知的空間であり、要するに、知的である祝祭的空間が生み出されていた。彼の得意

とする“お祭”の季節だった。そして、主体的には、「白樺」という梁山泊的空間を持ち、安保闘争を闘ったという名声があり（それは単なる無党派にない戦術や組織指導できる（しかも有能に）にしっかりと裏打ちされて）一要素ではあっても重要な党派と話がつけれ、かつこれも一要素ではあるが大切な、インテリゲンチヤと会話できる十分な知性があり、そして最後に、これらの総合でもあるが、かもし出す男のエラン（生气）があった。それは、追悼集で、南が書いているように“男伊達”であり、“見栄”と云ってよい。

私は、当時「吉田山の石段」に書いたように、時たま、運動と党派に疲れて、「白樺」へ行った。何とも云えない雑多な人種がたむろしていた。彼とは、協定したかのようになり、一切運動の事は会話しなかった。——むろん、時には、先に書いたように、必要な“調整”は、むしろ、電話で、きわめて事務的に行われた。

それは、長年の付き合いで、お互いが何を考えているかが分っているという事もあったかもしれないし、それ故に、マジにお互いの主張をした時の気まずさを避ける気持ちもあったであろう。

率直に云えば、当時の高瀬に対して“お前はエエワな”とでも言うより他に表現しようのない気分を持っていた。この気分は、親しさと〇〇と批判のコンプレックスで、分析不可である。

全共闘運動が終わり、彼のお祭り事は、ポップや、演劇のいわばサブカルチャーへと移行した。この領域については、私は、門外である。私も75年に会社勤めを始め、時折、白樺で飲み、時々、“俺の所に入出しているこういう奴がいるから、お前のとこで使ってくれ”といった類の電話があったりした。

彼が、今生存していたなら、今の時代の潮目の変化を読み取って、どういうお祭を企画するだろうか。

重信さんへ（追記）

何度か、間接的にお便りを頂きながら、筆不精と、スタンスの取り方がわからずに連絡せず申し訳なく思っています。

私も、もう人生の晩年になり、最後の御奉公と思って、諸運動にかかわったり、雑誌『情況』の手伝いをしたりして元気しております。そういう関係で、多くの昔仲間との交流も総括して、その一部に、当然、塩見、八木君を始めとする赤軍系もあります。

『情況』の和光君の文も、それとしては、興味深く読みました、でも総じて云えば、赤軍派、ブント圏、あるいは、新左翼圏、かつての自分の出自にこだわるのは当然ではありますが、もっと現代的に、現在の普遍的主張として抽象化する作業が必要なのではと考えています。運動をつくって行く事と、そのような理論的作業によって、何か新しい統一戦線（同時に、分岐＝別れも）が、できればと思っています。

お体を大事にしながら、そういった面での論究も期待しています。

—（編集部より）動体視力という言葉があります。動いているものを特別よく捉えることができる、視覚の能力のことで、スポーツ選手には特によく要求されるものではあっても、この高い能力を備えている人は稀であると聞きます。

仮に歴史を動体に喩えるなら、歴史を見るに動体視力が要求されることになりますが、このような動体視力を備えた人はまた、きわめて稀です。私が知っている人の中では、一人だけいます。それが高瀬泰ちゃんです。泰ちゃんは歴史の動きがよく見える人でした。あたかも野球のバッターが投手の投げるボールの球種をはっきり見るごとく、歴史のカーブやスピードの様がよく見えたに違いありません。そして泰ちゃんは遊びでみんなの心を掴むのがとても上手という才能がありました。子供の頃、その人間がいと遊びがとても楽しくて盛り上がるという仲間が必ず一人はいましたが、泰ちゃんは子供の頃どうだったか聞いてはいませんが、泰ちゃんがいると学生たちが喜んで遊ぶ、そのような存在でした。しかもただの一人も漏らしはしないので、誰もが泰ちゃんのところへ寄っていきました。

全共闘の学生の一人であった私は歴史の波に吞まれました。それでいて、その波とはどのようなものかといえば、皆目見えてはいませんでした。今また、全共闘時代以来の歴史の波が訪れています。私はまたぞろ歴史の波に吞み込まれ、しかも歴史がさっぱり見えないという、若い頃と同じ愚を繰り返すのでしょうか。それではあまりに策がな

い。ここは一つ泰ちゃんに会ってみたいという気持ちの一つも起ころうというものです。

そこで、生前の泰ちゃんと親しく、生前の泰ちゃんをよく知っている新開純也さんをお願いして、泰ちゃんを語っていただきました。

面会記

かおり女

～重信さんに面会して来ました。

We shall overcome を歌って来ました！～

2009年4月15日、水曜日、森本編集長と友人の住吉さん（本誌3号の表紙にも登場した女性です）、私の3人で早朝、新幹線で関西より行って来ました。

元はといえば2月、大阪医刑での手術後の回復を待って私たち3人も2月25日に面会予定が決まっていたのですが、その前日、突然の東拘への移送（この日のことは前号、原さんが面会空振り記を書いておられます）により、大阪での面会叶わず、梅の花が咲く頃、が、桜散る頃にやっと実現したのでした。編集長と私は2度目、住吉さんは初めての面会です。

小菅駅で東武伊勢崎線を降り、荒川の土手沿い高速の下を歩いている時は、ドキドキ緊張感も最高に高まって、内心どないなるんやろと思っているところへ、向うから腰の曲がった高齢の女性が、胸の前に何やらプラカードのようなものをぶら下げて歩いて来られます。「裁判員制度はいらない！！」と書かれているのが読み取れると、編集長がお名前を尋ねました。益永さんのお義母さまでした。“外に出る時はいつもこの格好です。死んでるヒマはありません”（85歳とうかがいました）と。記念写真を一緒に撮らせていただき、拝むようにお別れする頃には、春の陽気にも助けられ、少し緊張もほぐれていました。

手続き（この日は身分証の提示は求められませんでした）を終え、あまり待たされず、面会室へ。ここでも待つ間もなくすぐに、重信さんが入って来られ、まず、顔を拝見して、ほっとしました。数日前に髪を短くカットされたのがよく似合って、顔色も本当に輝いておられました。そこへ重信さん「さわさわの旗は？旗持って来ればよかったのに！」 私たちの頭

の中はもう旗でいっぱい、"あっ、そうか 気がつかなかった！しまったな、不覚、不覚、でも持ち込めるんやろか。。。?"がぐるぐる、編集長は披露する短歌（Tさんの無事手術が終わり、回復の病室の様子を歌ったものでした）を新幹線の中で必死に覚えていたのに、頭が真っ白になってしまった風で、途中でつまって、書いたメモをポケットからあたふた取り出して冷や汗たらたら。続いて重信さん、初対面の住吉さんに「お年はおいくつ？まあ！お若く見えますね。髪は染められてるの？そう、私は染めないんだけど。」お〜と！！ 間髪入れず正直に答える住吉さん、見つめる私。気をたて直して、やっと **we shall overcome** の合唱にたどり着きました。途中、何度も刑務官に「大きな声はやめて下さい」と邪魔されながらも2番はさわさわバージョンで完唱。**we shall overcome** を歌おうと決めてから2ヶ月余り、仕事の行き帰り、電車の中でも口ずさんでいましたが、本番はあっという間に終わってしまいました。いっぺんに肩の力が抜けました。次は旗をバックに歌おう！

刑の確定の時期も迫る中、きつと沢山のことをこなし、沢山の人を気遣い、療養とはほど遠い日々を過ごされていることでしょう。皆で快癒を祈っています。

帰りは、地下鉄綾瀬駅まで、東拘の濠のような小さな川べりに行きました。うららかな春の陽射しと解けた緊張の開放感の中、編集長は三線を弾き始めました。すると、たくさんの亀たちが三線の音を求めるように集まってくるではありませんか！本当ですよ！証拠の写真は重信さんにも送りました。川上に桜の木があるのでしょうか。花筏に親亀子亀勢ぞろいの感、30分ほど見とれていました。最後は、御茶ノ水、明大の近くの「祭」というお店（大将は重信さんの明大の同輩の方でした）でお昼を食べたことを報告して、面会記を終わります。

重信房子さんのアラブ時代の回想記『日本赤軍私史ーパレスチナと共に』が、河出書房新社より刊行されました。最寄の書店でぜひお買い求めいただきますよう。また、図書館へのリクエスト等もよろしく願いいたします。

短歌で遊ぼう(7)

さわ女と「寄っといで短歌」

題詠～「夢」～

<さわ女>

今回もみなさんの多くの歌、句に励まされつつ読みました。私は2月の手術後、3月までは腫瘍マーカーは下がっていましたが、4、5、6月と上昇を続けてしまいました。手術後、腫瘍マーカーは徐々に下がって正常化するはずでしたが、上昇を続けているのは、再発、取り残し、何かの異常かもしれません。数値は手術前の高さになってしまい、5月、6月と原因究明中です。東拘の医務スタッフもよくやってくれて、小腸に原因ありそうと機材、人材を搬入して7月1日、検査をやったところです。小腸癌は本当にあまり例もないし、機材もないようです。まだ結果はわかりませんが、本人は自覚症状もなく、通常通り元気です。また、再手術なら大阪かな？！と呑気にみんなの顔を思い浮かべています。その時は今度こそみんなとの面会は実現したいと夢を描いています。

<追記 7月8日に小腸の組織を採取して調べた結果が出ました。小腸から癌は見当たらなかったとのことです。そして7月1日採血分の腫瘍マーカーチェックは、これまで上昇を続けていましたが、下降に転じました。これからきつと良くなります。We shall overcome や、みんなの祈り、励ましのお陰です。ありがとうございます。>

短歌はみなさん達者で、私がコメントするのがちょっと恥ずかしいですが、楽しんでやらせてもらっています。「夢」の題詠はおもしろいです。夢ということが、希望でもあり儚なさでもあり、また夢の中に懐かしい人との出会いありと、夢ならまた、みんな歌がどんどんできそうですね。「夢」といった時、不思議な空間が頭の中に浮かぶものだな、きつとみな、そうだな…と実感しました。希望、悔い、懐かしさ、それぞれそんな思いがあっても、夢は自分の分身でいとしいものですね。みんなで、さわさわと夢をつなげて前向きな力にできそうな気がします。

影法師（岐阜刑）

暑中お見舞い申し上げます。

7月に入り毎日暑い日が続く塀の向こうの山から蝉の鳴き声が聞こえてくるこの頃、ふうさん初め、さわさわの会員のみなさまには、その後お変わりありませんか。近頃巷では新型コロナウイルスが行脚しておりますから健康には十分に注意して生活していきましょう。

さてふうさん手術から5ヶ月が過ぎようとしてしていますが、その後の経過はいかがですか。ふうさんが痛くなってから何か役に立てることはないかと、癌に関するTV放送や雑誌の記事を読みあさり、知識を身につけるようになりました。結論は現代医学ではたとえ悪性の癌であっても、放射線治療や抗癌剤の投与を確実に行えば、癌は治るそうですから安心ください。ただこの抗癌剤を服用すると、そうとうの苦痛が伴うそうですね。でも元気になってもらうためにはがんばってもらう他ありません。

さてこの度ふうさんが手術後、体力が十分に回復していないのにもかかわらず、東拘に移送されてしまったことについて大阪医療刑務所のありかたに憤りを感じ、おもいきり批判したいところですが、調子に乗って過激な文章にしてしまうと、発信に支障をきたす恐れがあるため、あえて控えさせていただきます。「さわさわ」7号「大阪医療刑面会空振り記」で原啓介さんが面会を一方的に断られて憤りを感じたというのは当然のことでしょう。もし私がお場にいたら、やはり同じことをしたと思います。これからは私たち会員になり代わり、ふうさんの援護射撃をよろしくお願いします。私は原さんの報告文で久しぶりに溜飲が下がった思いで感謝しております。

それからふうさんの無実を証明するためにパレスチナからライラ・ハリドさんが来てくれて「彼女は裁くのではなく報奨を与えよ」と法廷で発言したそうですが、私も同感です。一般の人はマスコミの影響を受け、赤軍派イコール全ての人が犯罪だと思いこんでる人が大勢を占めていると思いますが、これは誤った認識です。メンバーの中にはふうさんのように異国の地で革命運動に命を捧げてきた人たちも少なくないということをもっと知ってほしいのです。そんなふうさんがこれから裁かれようとしていることは非常に嘆かわしいことだと思っています。それでも一人一人の祈りと励ましがあればふうさんに元気を与えると共に、奇跡すら起きるかもしれません。みなさん最後までふうさんの無罪を信じて頑張ろうではありませんか。

- (1) 春の陽に我等の声に誘われて共に小鳥も詩吟会かな
- (2) グランドの桜吹雪を駆け行けば遠くに霞む虹の架け橋

- (3) 俯きし疲れて登る階段に春を報せる桜は散りぬ
- (4) 我誘うひと雨ごとに色を増す御望（ごぼう）の山の桐の花かな
- (5) 行進時トンボが肩に停まるなど仏の遣いや幸事の兆しや
- (6) 柔肌の大福餅をそつとなぜ遠い思い出頂きました
- (7) 我が道は友の回復祈ること僧には遠き無期囚なり
- (8) 生きることそれは己との闘いだ雑草の如くたくましくあれ
- (9) 退院の祝いに短歌を捻れどもレベルの低さに頭を抱え
- (10) 大勝利ガザの大地にキスをして宴をつくせ英雄たちよ
- (11) 蝉が鳴く格子の外は夏だよと塀の向こうは天国だよと
- (12) 励ましに短歌知らずが短歌詠み君に習わん過日の春に
- (13) 我生きて望みを果たさんその時は千里を行かん鳥になりけり
- (14) 夢なけりや夢をもてよと夢美人夢を授けて夢枕かな
- (15) 我が夢は写経千管書き納めふうさんの病いただ治すこと

俳句

- (1) 流れ来て季節報せよ椿かな
- (2) 欠伸出る筆は重たし春の午後
- (3) 空汗に我が目映して泳ぐ箸
- (4) 紫陽花や滴ひと振り蛇の目傘
- (5) カタツムリ見詰めて欠伸もらいけり
- (6) 木の匂い草の匂いの驟雨かな
- (7) 若葉萌ゆ一樹一景見定むる
- (8) 遠くより母の呼ぶ声昼寝覚め
- (9) 窓に舞う揚羽に自分重ね見る
- (10) 窓ガラス拭けば確かに風光る

<さわ女>

いつも過分な応援のお便りありがとうございます。前述のように、癌はなかなか元気で我が体内でとびはねているのかと思います。抗癌剤治療の投与4日目に大阪から移動しましたが、もしもう少し、一ヶ月ほどいたら、関西の友人たちに30分も会えたばかりか、腫瘍マーカーの上昇に対して手もう

てたはずです。原さんの思いは私も同感です。でもまた、「手術して切ったり貼ったりしたら、早く元の管理場所に戻す」という、これは私は、検察当局の指揮のせいだと思っています。移監、戻りの際にも「高等検察庁の指示により～」との書面を読みあげていました。権限が現場に小さいのが、日本の官僚主義の姿です。大阪医療刑よりも、検察の判断、指揮こそ問題です。文句を言おうと監査官面談を待っているところです。（監査官面談とはかつては大臣の「情願」というおかしな名で呼ばれていたもの。一年に一度監査官が巡回してきて、被拘置者から苦情などを申し立てることができるものです。でもいつも「希望の開陳に過ぎない、却下」と、一度も受け入れられたことはありませんけどね。）影法師さんのエールと連帯にまず感謝します。短歌も句もたくさん零れるように詠まれていますね。どの歌も岐阜刑の情景でしょうか。（1）、（2）、（3）、（4）、（5）、（6）、（7）、（8）どの歌も束の間の獄の穏やかなホッとした姿を捉えていて、影法師さんの心の持ち方で零れた歌と見うけました。ああ、小鳥がいるのだな、桜が吹雪のように舞うのを見れるのだな、山も見渡せて、きっと懐かしい桐の花も浮かぶのかな、トンボも訪れるのかな、蝉も…と。東拘の空も土も見えない密封パックのところからは何だか羨ましい情景です。無念や思いは多々あるでしょうが、そのような思いを土台に情景を詠むと深みがありますね。「夢」でも病気が治るように詠んでくれてありがとうございます。

影法師さんの俳句は本領発揮のいい句が多いです。（4）の紫陽花、（5）のカタツムリ着想が好きです。「紫陽花や滴を青に染めにけり」と詠みたくなる一句ですね。（8）と（10）は独房の私の経験と重なります。たくさん歌も句も励ましも感謝。

M・M（岐阜刑）

さわ女さん、お体の調子はいかがですか。「すこぶる順調、めきめき元気回復」とか「新しく生まれ変わった気分で張り切って」とのさわ女記を拝読して本当に安堵しています。さわ女さんの回復に向かってまたみんなで大いに短歌し遊んでいただけたことにととても喜びを感じている今日この頃です。時に、拙い私の作品を一つ一つ評してくださりとても心を癒されています。また、長い間、殺伐とした中で生活してきて人

の温情というものに触れる機会がなかっただけに、「さわ女」の薫りをかかえてきてくれますので目に潤むものを感じます。このようなかたちで、さわ女さんに巡り逢えたことにととても感謝しています。

～題詠「夢」に～

- （1）亡き母の夢はかなしび夜の静寂^{とじま}少しのあいだ何も語らず
- （2）春めくや布団にひとり寝転びて天井の染み吾が見つめつつ
- （3）大文字つぶやく言葉それぞれに目は夜の空ショーに釘づけ

俳句

- （1）揚げ花火つぶやく言葉国訛り
- （2）留守の日の少したのしき冷蔵庫
- （3）鯉幟風の吹くまで昼寝かな

<さわ女>

前述のごとく癌は私ぐらい元気ですが、今のところ自覚症状なく、上告審判決までの間、こうして、「短歌で遊ぼう」などで語り合える喜びを享受しています。判決後は有罪ならば（日本の司法制度の政治判断からはそれが濃厚ですが）こうしたみなさんへの歌や句のコメントもできなくなるかな…、何か方法はないものかな…と、時々考えています。細い絆になっても続けたいものです。

「夢」の題詠 どの夢の歌も夢という字が入ってなくても強い感慨が伝わります。己の生き様を見つめているためでしょうか。M・Mさんの（1）の母への思いは強く響きます。俳句のほうは、M・Mさんの、きっと、率直で楽しい性格を句から見つけています。短歌や句はお互いに知り合いでなくても心が通ったり、性格をかいま見れるのが楽しいですね。（2）にM・Mさんの素顔を見て思わず笑いました。

流 奈友香（宮城刑）

- （1）届かずの募る切なさ綴る文夢路偲びて貴女の傍に ～題詠～
- （2）輪廻などないと思ったこれまでは今は信じる彼の転生
（今年1月死刑により逝ったNさんを偲んで追悼を込めて詠みました。）

<さわ女>

波女さんの友人として、彼女への励ましの二首と読みました。波女さんのN

さんへの信頼、Nさんへの波女さんへの信頼は私も文を少し読ませていただいて感じていましたが、ねぎらいと、前向きな思いを二首に見ます。これからも歌でこうして支え合えることを願っています。

Y・M (千葉刑)

私の夢は映画を作ることでした。現実的に今は無理ですから。別の夢を持っています。その一つに“さわさんの生の声を聴くこと”があります。これはさわさんが元気でいてくださればあとは私次第で何とかできます。無期刑を、生きたままの死刑だと思いと暗くなりますが、何事も前を向いて生きていますから。一步一步前を見ながら生きていくことも夢の一つです。

- (1) これまでに生きた我が身の現し世は夢と思えばあきらめはせず
- (2) 夢を見てさめては思う獄の身を太陽はあれど光は遠く

<さわ女>

そうでしたか。夢は映画をつくることでしたか。時を経てそんなことも可能かも知れませんか、また、獄にあつて、関われることもあるかも知れませんか。シナリオとか？！（私には無理ですけど…）夢を考えた時、Y・Mさんは失った夢の思いが強く出ていますね。ほんの一瞬の脱線が、今の理不尽、不本意な現実を強いられてしまったのかも知れませんか。そんな思いを振り払って、前に行こうとするベクトルがありますね。そのベクトルが輝きますように。必ず新しい生き方の中で「さわさわ」の夢と重なり合っていくでしょう。映画はいくつになっても作れますよ！みんなとの共同の一役を買って出て、いつか実現されますように。

せえたか童子

まほろばに夢を見し人誰の事革命の焰の中で死ぬ時を

<さわ女>

初登場の一首。挑戦歓迎です。少しわかりにくいですが。わかりにくく、多様に解釈することを意図しているのかもしれませんが、また、言いたいことが、まだ、三十一文字になじみきれていないようにも思えます。でも、リッダ闘争の戦士の姿が私には浮かんでくる歌です。時々「さわさわ」吟遊などで、さらに詠んでみて、楽しみ交流してください。

おおみ女

- (1) パレスチナの解放の夢をオリオンに祈る民この声ひびきゆけ
- (2) 人質の身代わりとなりし男をして獄舎につなぐ大和哀しも
- (3) 「大地の牙」「さそり」「狼」を君知るや生命を問ふて今を生きあゝる

<さわ女>

以上の三首は上京して救援活動をはじめているおおみ女さんの三首です。「ひとりピラまきの会」を起こして版画の素晴らしい絵の上に一首。下には、毎回変わらぬ赤い版字で「私ノ手が死刑ヲ執行シテイル」と、人々にも自分にも、死刑が自分たちと関わっていることを訴えています。いつも獄中の人々にも送ってくれていて励ましてくれます。(1)、(2)、(3)共、心の底から共感、共振し、一人から訴えようとしている、おおみ女さんの姿が切実に浮かび上がります。他にリッダ戦士を歌った群青色のあまりに美しい版画、人に見せたくて送ってしまい、手元にありません。あれも良い歌だったのに…。エールと連帯と感謝を記します。

ごめんねジロー

- (1) 革命の夢やぶれて恋に墮つあれからいくとせ再びの夢
- (2) 明け方に元気な妻の夢をみた今日は明るく介護できそう
- (3) 夢を喰うバクとバカとは紙一重 (あとの七七がうまくまとまらず)

<さわ女>

(1)は実感的ですね。でも、「革命の夢にやぶれて恋に墮つ」ほんとうかな。“革命なんぞくそくらえと恋に生き”のような気もしてしまいます。当時の同世代の仲間たちには負け惜しみも含めて両面あったでしょうね。なかなか革命と恋を両立させられない友人をあれこれと思い出しつつ。でも“あれからいくとせ再びの夢”やはり良いです。力強くて。(2)は(1)の「墮つ」のからくりみたいに愛妻家の姿が出ていますね。前号の「もぬけ」を思い出しています。(3)はこのままで句でもいいですよ。続けるならば、“つまずき多し「革命家」の道”の七七はどうでしょう。なんか、ブント・社学同みたいですが…。

かおり女

あさがおの花の数だけ夢があった今朝もその道駅へと駆ける

俳句

- (1) 護憲の日ついにミナミへ「さわさわ」旗
- (2) ジャスミンの香に誘われてまわり道
- (3) 紫陽花の茎切る音がひびく夜
- (4) まばたきも呼吸も重たき夏至の雨
- (5) りゅうのひげ俯く花に手を添える

<さわ女>

いつも心のこもったお便り、お百度参りのお礼も送ってくださって、過分な友情に感謝ばかりです。題詠の一首。なかなか鮮やかですね！情景も鮮やか、短歌の詠みも鮮やかです。たくさん次から次へと咲くあさがお、たくさんのお夢。何物にでもなれるような希望。「夢があった」は過去完了形でなく、夢があったと時代を捉えかえして、希望のベクトルへと鼓舞するかおり女さんの駆け足が聞こえてきそうです。夢、やっぱり、ふつふつと、あさがおの花のごとくに今も湧いてきますね。歌もいいですが、近頃は俳句も決まっていますね。才能開花という感じです。(1)は5月3日の改憲阻止の集いと、その後の御堂筋のデモ行進に「さわさわ」旗を持つ女性旗手二人のすごいすきな写真も受け取っています。情景イメージも臨場感を持っていて、私自身もその後にぞろぞろと歩いている気分が嬉しくなりました。その様子を句でびしりと詠んでいて、「さわさわ」旗が見えるようです。(2)も秀逸です。かおり女さんの句をいただいて、私もその時こんな一首にしました。“ジャスミンの香に誘われまわり道と我が友語る五月となりぬ”(3)もいい句で好きです。静寂の中に鉄の音とまるく満開の紫陽花のたわわな花が浮かびます。“紫陽花の茎切る音の心地よい響き伝える一句届きぬ”と私も思わず歌が零れましたよ。(4)はそうですね。東京も夏至は雨。東拘の夏至はルーバーの隙間からどんよとした雨空でした。なかなかすごい夏至のとらえ方。なるほど！と感じ入ります。(5)もかおり女さんのやさしさがあふれる一句。今後とも才能の開花を更に！

哲蕉

- (1) 見果てぬ夢を追いかけて辿り着く昔日の光そっと溜め置き

- (2) 若き日の友と歩いた夢見橋風雪に耐えて勇姿今もなお
- (3) 夢繋ぐ子供から孫へ老親の心境語る「手紙」流行りおり
- (4) 消えし夢指折り数え儂くもままよ明日と気を取り直す
- (5) いつの世も夢は夢にて儂くも寄せては返す波の如くに

<さわ女>

哲蕉さんは私の腫瘍マーカーの数値が上昇していることなど按じてくださりこんなことを書いています。「できの悪い私の短歌の批評をされるのは苦痛で投稿を見送ろうかと思ったのですが、今の重信さんにとって『さわさわ』は息の抜ける場として楽しんでおられるようなので送ります。」とあります。そんな連帯は嬉しいです。でも、いい歌ができてではありませんか。哲蕉さんの歌を見て、ああ、人が夢を見るというのは、儂いという字になるんだな…とあらためて気付きました。私は夢という叶えるためのものという感じに取りますが、そうだった、叶わないものという感覚も、夢として大切に捉え返さないと…と、気付かされます。

(1)の歌は革命の志ですね。そして、どこかでその時の志の正義を手離さない意志が、今の哲蕉さんの生きる姿勢に繋がって感じられる一首です。

(2)の歌はとつてもすっきりと零れた一首のようで好きです。情景が浮かびます。(3)は哲蕉さんが手紙の詞を送ってくださって、いい詞だなあと読みました。この歌詞に深い気持ちを持って一首に詠んだものです。いたわりあう触れ合いを介護の研修で実践している分、歌が生まれたのですね。(4)と(5)はちょうど還暦定年を終えた今年、これからの人生設計をしながら過去も振り返り、やれること、やりたかったこと、やれないこと、これからの道のりを見通しながら、またチャレンジする中にあきらめることの一つや二つありますね。「儂い夢」を歌っておられますが、現実には計画的に地域社会のリーダーシップを取りながら生きている、大いに幸せな哲蕉さんです。(1)～(5)の夢の中で私は(2)の歌がやはり希望の時代の情景が見えてとってもいいと思います。歌で心を切り取り、歌で心を語り合って、これからも躊躇せずに詠んでください。感謝！

平良

- (1) 夢を見てその夢破れ傷つくも叶えるための永久の挑戦
- (2) 六十をまだ折り返しと欲張ってあれもこれもと次の夢見る
- (3) 四十年私の夢と付き合ったその居酒屋も今日閉店

<さわ女>

(1)も(2)も平良さんの生きる姿勢を示していますね。いつも夢を現実にも変え続けているのがすごいところです。私も(1)、(2)はいつも同感、心掛けていますが、平良さんのように、ひょいと頭脳と機動力で実現できないのです。場所的限界を理由にあげていますが、志だけは一步一步のつもりです。ことに、(2)の一首は私の思いです。(3)は行きつけの店。行きだしたころは当時、若い夫婦と二人で頑張っていた、椅子席七つだけのお店だったようです。それから四十年、当時は「癒し」という言葉もなかったけれど、そんな思いで通った店が主人に先立たれて、母親の体を心配する子供の願いで閉めることになったとのこと。「きんぴらごぼうやほうれん草の胡麻和え、しじみの味噌汁、春先にはたらちの芽の天ぷらなどがおいしい店でした。寂しさではなくまっとうされたすがすがしさを表現したかったのですが、未熟さをひしひし感じます」とのコメントがあります。十分思いは伝わりますよ。でもこうしてもいいかもしれません。“今日閉店その居酒屋に乾杯す我が夢と歩みし四十年”でも韻がよくないですね。やっぱり前の方がいいかなあ。でも想いを詠むのが平良さんの歌のいいところです。その想いが歌にあふれています。

華灯

- (1) 夏祭りマツヨイ草を髪に挿し一夜の夢をともし踊らん
- (2) 渋茶の着物着る母カラーンと音一つ立て夢より出ゆく
- (3) 手触れなば染まりそうな闇の中浮世の夢詰め「きぼう」稼動す
- (4) 万能細胞資本の前に拝跪し無産者には夢だけ語る
- (5) 夢語る夢のみ語る国アリ夢みる事すらタブーの国あり

<さわ女>

はじめの一首は私も自分の夏祭りの情景と重なって盆踊りに夢中になった幼い日も、また、髪に花を挿して踊った少女の日も浮かびます。マツヨイ草が

この一首をぐんとひきたたせています。(2)の歌は華灯さんの真骨頂ですね。華灯さんは母上を詠むとすごく印象的で良い歌を詠むので好きな一首です。色彩がある華灯さんの歌に母親の端正な佇まいが浮かびます。(3)、(4)、(5)は時事詠というか、夢の題詠にかけて違った視角を開いてくれています。(3)“浮世の夢詰め”漆黒の宇宙の「きぼう」が動き出していますね。それに(4)の万能細胞のこと。そうそう異議なし!の思いです。無産者に語られるのは夢ばかり。この日本の国の、本当の取り仕切りは、無産者には決して知らせずに「うまく」やってきたのですもの。今それが破綻しています。“夢の万能細胞”が「社会の役に立つ」ことは間違いないと思うけれども、資本、権力の側の企ても見ておこうという志が生きていますね。(5)はもしかして「夢見ることすらタブーの国」はお隣りではなく、我らが祖国ということもありますよね。これだけ一人一人が砂のように個にされてしまっている。だから私たちは「さわさわ」で更に共に!と生きたいですね。

だっちゃん

- (1) なめくじらその痕跡に育んだ消さざる夢が歌となり
- (2) サンシンのサーブリーンをゆめみつついまはただメールうつのみ。

<さわ女>

かつての戦友だと気付き、あれこれ無理をお願いした結果になったこと、お詫び方々感謝します。上京し、また戻られたのですね。正面对峙から斜に構える生活になったのか??と邪推したいです。そんな生き方が(1)、(2)ともに詠まれているように思います。なめくじらは嫌われつつのそりのそりと、じっと生きている、愛敬のある活動家かも知れませんね。(2)もアラブのサーブリーンの歌を紹介くださったと森本さんは張り切っています。だっちゃんはたくさんの知識や経験、そして教訓もお持ちですから、メール打つところから人々に返してくれているのでしょう。トワエモアを思わせたさわやかだっちゃん(40年前!)に更なる歌も活動も期待します。

波女

さわ女さん、短歌のことでいつも励ましありがとうございます。「夢」ですが、わたしにはいま一つ出て来ず、それよりも無我の「無」の方が強くできます。それでやっ

と、やっとの句です。

<庭掃除思ふは一つ無念無想>

- (1) 成らず実の柘榴花集め上見れば選ばれし実の凜としており
- (2) 六月の晴れ間に甘きくちなし香何を語るかつい立ち止まる

<認知症に思う>

- (3) 義父は見る話す叫ぶ聞く語るおしゃべりな脳に人生を見る
- (4) 神に成る夢を見しとぞ老いとせの魂みたまひとつに磨かれゆくか

<子育てから母を想う>

子育ての中で教えられつつ、自分の子供時代何もしなさ過ぎたから、「親子」という繋がりがどうもわからないでいます。でも厳しさもしんどさも、そのまま見つめるとその姿が見えてくるようです。

- (5) 人寄せぬ触れるべからずてっせんの厳しき青さ母の背と似て
- (6) ふとゆるむ華道ならいし母の目の語りし瞳に時計草まわる

<さわ女>

(1)はいつも差別された人の側に立とうとする波女さんの目線から見える情景が鮮やかです。金子みすずさんのように、一つの一般的な見方の反対側からはどう見えているのかに自然に気付いて歌にするセンスは好きです。これからはどうかしてください。(2)もくちなしの匂いから意志を読みたい波女さんの感性が伝わります。(3)、(4)は介護しつつ、じっと観察し、人生とは何ぞや老いと神、人間とは？と常に思考する波女さんの内側が少し見えます。おしゃべりな脳を持っていても無口を表現形態としている人もいます。でも老いたら、きつとおしゃべり脳の方がいい人生ですよ。(4)は老たけた人生の尊厳を感じます。波女さんの持つ人の見方は歌に味わいを持っています。(5)はいい一首。母なる自分と重ねているように思います。「青色の花が好きですね。大人っぽいすました中に孤独感のある…」とありました。波女さんの見ていた厳しい母の一面と、溢れる愛を表現しきれない、やさしい母親の姿が子供心には統一的にはとらえきれず、厳しさが記憶に残るのかも知れません。でも、子供にはかかないですね。子供の鋭い視線を受けて、(5)が浮かんできたのかもしれない。子育ては人格と人格、心と心向き合うことですね。私も

自分の都合で叱っている自分に気付かされたことがあります。本当に子供のために叱ると通じるでしょう。子供に素直に向き合えば通じあうものですね。厳しさもしんどさもね。

はんかく志

川柳

- (1) 戦争を知らない奴らが壊憲論
- (2) もう一度ジグザグデモをやりたいな
- (3) 九条はアジアへ謝罪の意味もある
- (4) 論言も知らぬだろうなアソ太郎
- (5) 日本人五輪万博W杯
- (6) 国の為昔イヤほど聞かされた
- (7) 有識者御用学者の代名詞
- (8) 核被害語り続けて喜寿むかへ
- (9) 若者に戦争の被害伝えねば
- (10) 沖縄に思い馳せないヤマトンチュー

<さわ女>

はんかく志さんには歌や句でなく川柳が専門と聞いてお願いしました。私にはコメントできる才能はないのですが、「異議なし！」ではまずいか…と思いつつ、それ以上何と言ったらいいのかな?!へたなコメントは不要、読んでの通りという感じです。ことに、(1)、(3)、(7)は本当に!「有識者御用学者の代名詞」ですね。しかも私のように30年ほど間が抜けていて、日本を見ると、かつての「右翼」といわれていた政治家が真ん中に「普通の政治家」として座っていて驚きました。また、政府に育てられた人材が「有識者」としてマッチポンプのしくみのうえにマッチポンプの話ばかりで、これも驚きでした。メディアからも自由に語ることが自粛で聞こえず、いつの間にか中軸がぐんと右傾になっていました。だからこそ声をあげ続けたいです。はんかく志さんの語り続ける闘いや川柳もまた、「さわさわ」と繋がっていて嬉しいことです。はんかく志さんの川柳を受けて、我々が「短歌で遊ぼう」の中からも川柳の詠み手が生まれそうですよ。「ごめんねジロー」さんや、「だっちゃん」なん

かきつとその才能あり、詠めるのでは?!とまた、期待をふくらませています。

田川晴信

押し寄せる波にもまれて手を挙げしはなつ言葉は国はまほろば

俳句

- (1) 今もなお夢を求めて身もうつろ
- (2) 日が落ちてお寺に三つの鐘がなる

<さわ女>

田川さんも癌の手術をし、初期で抗癌剤も使わずに回復中です。本当に良かったです。体調も回復し、時々自炊の力量もつけて思索に励んでおられますね。思索よりどんどん行動したいところでしょう。無理しないでくださいよ。短歌は本格的に思索されて(され過ぎて?!)私では意味がとりきれないです。批判精神として詠まれているのでしょうか。想像情景を重ねることができずにいます。「国はまほろば」のところ、今の国をまほろばと呼ぶ者たちとは何ぞやという思いでしょうか。『まほろば』としたいから変革を」と叫ばずにはいられない田川さんです。(1)、(2)は田川節ですね。田川さんの句はまじめなのにとぼけている風で味があって好きです。(1)は病気の後だからこそ「身もうつろ」が精神のみならず肉体をも感じさせます。でも夢を現実繋げることの行動をする人なので、身体をいたわりつつ行動をと念を押しておきたいところです。(2)は田川さんの素直さがそのままの味です。これからも思索しつつ、また作ってください。どうぞ、健康のために食事療法を大切に!

原啓介

- (1) 新緑の五月に君は退院し我と語りぬ夢の浮橋
- (2) すれ違う電車の窓に吾を映して数多ある誤りを視つ
- (3) 愛を持ち愛より深し信頼に心奪われひとり道ゆく
- (4) 荒地より届く便りのはかなさに我が身照らしてはるけき自問
- (5) 5月末どうしようなき友の顔浮かんで消え消えては浮かび
- (6) 宇治川の清流にある朱い橋静寂のなかじっと見つめつ
- (7) 夢の夢夢の浮き橋渡るときただ無言にて無事を嘯みしめ
- (8) 生還の畏友の姿嬉しくてただ嬉しくてひとり抱きつつ

(9) 愛ありて悲しみもあり人生は時代(とき)に抗う勇氣ありても
<さわ女>

(1)は田川さんの退院を心から祝して穏やかな良い写真とともに、この一首が添えられていて、うまいなあ、ぐんと歌人になられたと感心しました。歌がすつと情感から零れるのは情熱的であり、またその情感を、もう一人の自分が見つめて詠む力があるということでしょう。(2)どんな人でも前向きな力を注ぎ、情熱で見えなかったことが反省や謙虚さにふと揺り戻される一瞬があります。それをこんな情景に切り取って歌にできるのは秀逸ですね。もう少しリズムを整えたら、もっと残る記念すべき一首になりそうです。(3)は喜びのはずが終わりに「ひとり道ゆく」が何か寂しげですね?!心境の変化や如何に?(5)はリッダ闘争のかかわりのある人々を描いて今も離れない心情が率直に零れた一首ですね。(6)、(7)、(8)はやっぱり尊友田川さんへの想いが溢れています。(9)は達観したような目線。何か葛藤を超えようと自分に確認するように。(3)と共通する心境を感じます。

森本忠紀

- (1) 陽の光浴びて輝く畝傍山いま新緑の息吹き萌えたつ
- (2) 降る雨にほのかに光る紫陽花の藍を映せるおみなの瞳
- (3) 高校の同窓会に会う君は初めて知りし異性なりき
- (4) 高校の思い出の女懐かしくもつと優しくしてあげたかった
- (5) 遠き日の君を想えば残る悔いわが優しさの足らざりしこと
- (6) 同窓会みな老境に入りたれば夢披露してエールを送る
- (7) 青春の夢に殉ぜし魂偲ぶ惨めなること窮めたりしか
- (8) 書いては消し書いては消しの半生に波の洗える舳先わが夢
- (9) 捕われの身なるも心囚われずサミングアップ夢を語るよ
- (10) パレスチナを世界を駆けて羽搏ける君が紡ぐは「さわさわ」の夢

俳句

- (1) うららかや軒に干したりデモの旗
- (2) デモの旗競いて泳ぐ鯉のぼり
- (3) 風涼シアラ還掲ぐデモの旗

- (4) 歩む孫並木つつじと背くらべ
- (5) 紫陽花は恋を讃えるために咲く
- (6) 紫陽花の罪を贖う藍の色
- (7) 廃線のレールの錆や七変化
- (8) 誇りに枇杷の家族はみな黄色
- (9) くちなしや訪ねあてたる家の辺に
- (10) 薔薇笑う関西人のノリの良さ

<さわ女>

忠紀さんの短歌は他者への思いが溢れていますね。高校の同窓会で初恋の友と出会えたのでしょうか。(3)から(6)の歌の中では(5)が素直でいいなあと思います。そんな思いを同世代の誰もが一つ、二つは持っていることでしょう。(8)は様々に自分を捉え返し、歩み、考え、そして今自分の本音と確信を解き放って人々と出会えている幸せを感じさせます。夢はまだまだ！これからですね。(9)(10)は私への励ましエールとして感謝して受け取ります。文通の中でいつも敵傍山が真近にあって、折々に詠んでくれている季節感がいつも好きです。今回の(1)の一首も光が見えるようです。俳句は日常の情景を切り取って歌にする森本さんの才能ですね。(1)～(3)もかつての全共闘世代の人々のデモが目に見えるようです。(4)はいい句ですね。孫をこんな風に歌えるのは幸せですよ。哲蕉さんも孫のいい句がありますね。(9)も好きです。どの句も情景と色彩があって、独房から世界をひろげてくれる句ばかりです。ありがとう！

丸岡修

- (1)「今羽田にいる父さんによろしく」母への最後の公衆電話
- (2) 死に水も取れぬは我への報いか夢の中では生きる父母
- (3)「左翼はシーラカンス」と言われようとユートピア夢見てなぜ悪い
- (4) 爆弾に毀された子の腐敗止めのレモン絞りで夢であればと
- (5) 夢の中今朝も銃撃戦フロイトよ君の分析は間違っている
- (6) 同志らと宴のさなかふと気付く夢よ醒めるな我は獄中

<さわ女>

速達の「さわさわ」編集長の便りが届きました。こんな風に。「ひまわりとビッグニュースを分かちあう」丸岡修さんから手紙をいただきました。ビッグニュースでしょう！これまで通信類を何度か郵送してもらっていて、その度に、その封筒の表紙に、通信文だけで手紙がないのをごめんねという意味の「謝通信のみ」と書いてありました。正直、手紙をいただくことがあろうとは思ってなかったので、大びっくり。(中略)その丸岡さんの短歌です。6首送っていただきました。病みがちの身なのに、また発信枠もとても制限されている中からこうして短歌を送ってくださいます。それが『さわさわ』への何よりのエールになることをよく知っておられます。「ええ奴やなあ！」と編集長は大喜びです。私も大歓迎です。きっと読者の一人の与作爺こと泉水さんも嬉しいはずです。仲良く、みなで歌詞や曲を捻りあった時代を思い返しています。きっとそのうち与作爺も?!と期待したいところです。(1)、(2)は共通体験を思い返して重ねています。私も、38年前、父に羽田から赤電話を、「じゃあ、行って来ます」と掛けました。「やすやすと帰ろうと思うな。元気で頑張つて来い。」と、父の声を聞いたのが最後でした。そしてまた、夢の中の父と母はいつも生きていてくれます。死に水を取れなかったことが、返って生きている姿しか思い出さない幸せと考えることもできますよ。(3)、(4)、(5)も丸岡さんらしい一家言と姿勢。わたしもよく批判されたものです。このフロイトさんのようにね！(6)も共感。夢を見ながら、あ、夢だなと思いつつ、まだ醒めるな！と思う夢ありますね。ことに同志らとの語らいや宴。

さわ女の「夢」の歌

- (1) 夢に酔う過去形の夢とりだして逝きし友らに独白よ届け
- (2) 邯鄲の夢のごとくに独房で胸躍らせる人生もある
- (3) 彼岸より夢の中へと訪れる我が母若く桔梗の浴衣
- (4) 諦めぬ限り叶うと夢のこと祖国解放語りし友らよ
- (5) 一炊の夢にはあらずパレスチナ大地踏みしめ闘いし日々

次回「短歌で遊ぼう」(8)の題詠は「身体(頭、手、足等何でも可)」です。奮って投稿くださいますよう。

【編集後記】<隣人は地上に果てしなし曼珠沙華> 今年に家族で一泊旅行する機会があり、ちょうど彼岸花が群れ咲く光景に到るところで出会いました。こうして、文章を書こうとして目を瞑れば、群がり咲く真っ赤な彼岸花が鮮やかに浮かんでまいります。そして、その姿は、この8月に逝った牧野一樹さんの笑顔に重なります。<目瞑れば君の笑顔や彼岸花> 牧野さんに贈るありがとうとさようならの句です。／表紙の絵は星野文昭さんが描かれたもので、妻暁子さんの承諾を得て掲載させていただきました。星野さんはかつての沖縄闘争のデモの最中、警官に火炎瓶を投げて死亡させた容疑で罪に問われ、無期刑で受刑中。逮捕されて以来、一貫して無実を訴え、獄中34年になります。その間星野さんは風景画や静物画をはじめたくさんの絵を描いておられます。それらの絵を見ると、人間が絵を描くという行為の初源的なものに思いを馳せられます。そして獄中34年、未だに出られないということが重なってぼくの胸を揺さぶります。じっとしてはおれない気持ちになります。できることは何でもやりたいと思っています。／ぼくが住む町大和高田で、初めて米澤鐵志さんのお話を聞く会を催すことができました。先日、9月26日のことです。子供の数を入れると40人を超える人たちが参加してくださいました。この種の催しを地元でやるのは初めてのことで、最初どうするか逡巡しましたが、中学の同級生二人が支持してくれたことが開催への背中を押してくれました。入院中の両親は二人とも無言の励ましを送ってくれていたに違いありません。他にどれほど多くの人に助けってもらったことでしょうか。人間一人が生きるとは何と多くの人に助けってもらうことか、感謝とともに学びました。／次号10号は1月発行の予定です。お便り、投稿等は12月中にお願い致します。(森本)



販売は1冊300円です。

なるべく年間購読をお願いします。

送料込みで年会費は2000円です。

(郵便振替口座 00920-2169764

さわさわの会)

〒635-0061

大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002

mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp